

波乱の人生を歩んだ「江」

信長の妹・お市の方と小谷城主・浅井長政の間に生まれた三姉妹の三女・江。二回の結婚を経て、第二代将軍・徳川秀忠の正室となった江は、秀吉や家康など多くの戦国武将と関わりを持ち、過酷な運命に翻弄されながらも、激動の戦国時代から江戸時代に転換する日本社会に大きな足跡を残しました。ここでは、波乱に満ちた人生を歩んだ江の生涯をたどります。

二度の落城で両親を失う

江は、父・浅井長政が織田信長によって自害に追い込まれ、小谷城が落城した年にあたる天正元年（1573年）に、浅井家の居城である小谷城で生まれました。小谷



江(崇源院)画像 (養源院蔵)

城落城後は城を脱出し、母・お市の方や姉の茶々・初とともに、織田信長に保護され、伊勢（三重県）で育ちました。小谷城落城から9年後、本能寺の変で信長が自害した後、お市の方は信長の家臣だった柴田勝家と再婚し、三姉妹も勝家の居城北ノ庄城（福井県）で生活することになります。しかし天正十一年（1583年）、勝家は信長の後継を争って羽柴秀吉に敗れ（賤ヶ岳の合戦）、その居城北ノ庄は落城。お市の方は三姉妹の養育を秀吉に託して勝家と共に自害します。父母を亡くした三姉妹は、新たな人生を送ることになりました。

秀吉の庇護

北ノ庄城から脱出し、二度目の落城で母を失った三姉妹は、羽柴秀吉の保護下に入り、安土城で生活するようになったと考えられます。しかし、安土城は皮肉なことに三姉妹にとって父・浅井長政の仇である織田家の居城です。三姉妹は、戦国を生き抜くためにこの苛酷な運命を受け入れなければなりません。

ただ秀吉にとって、この三姉妹は織田家の姫君という認識があったと言われており、この先秀吉との関わりが次第に強くなっていきます。

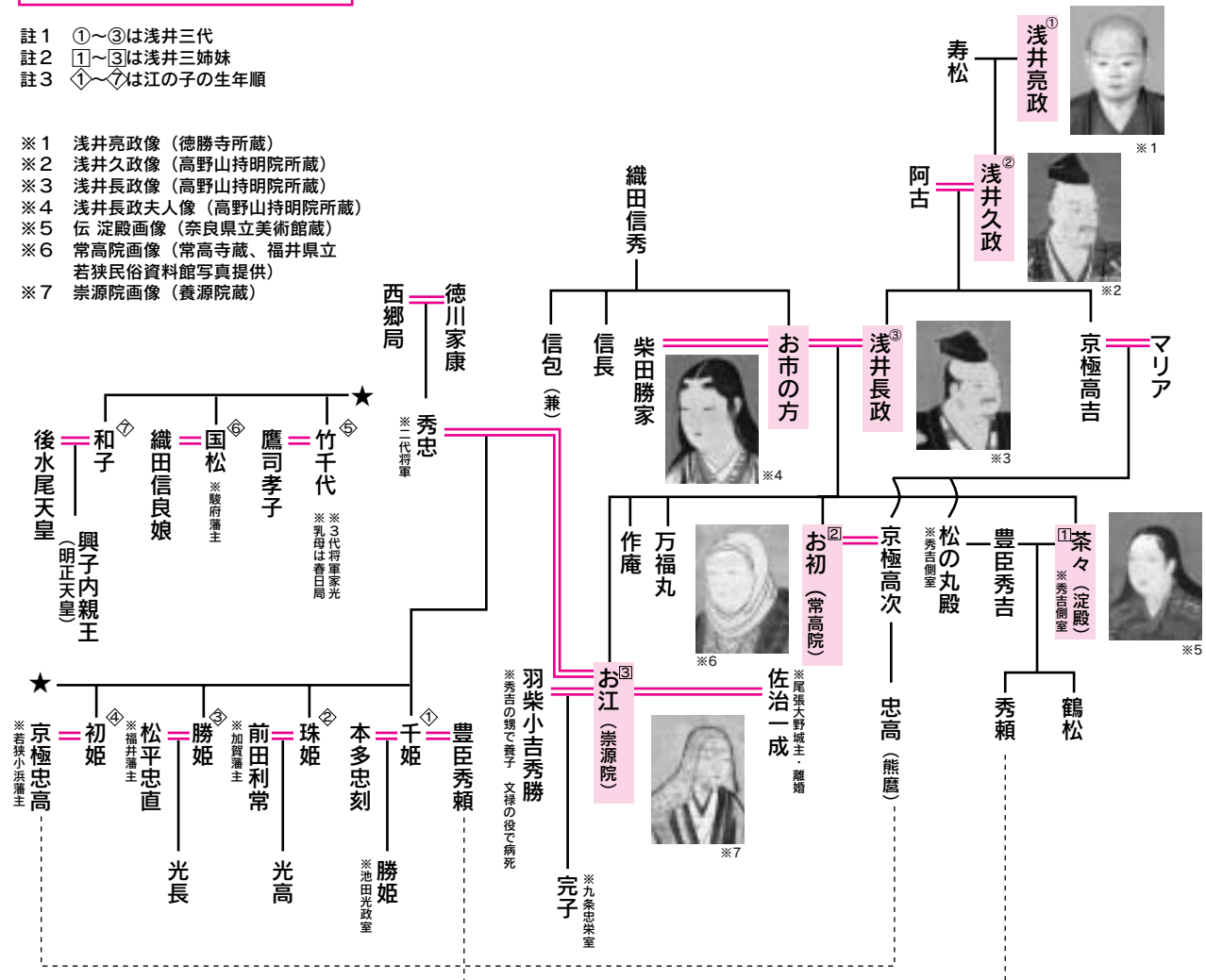
江の結婚(離婚と再嫁)

秀吉は、江が12歳の時、天正十二年（1

江をめぐる人物関係図

註1 ①～③は浅井三代
註2 ①②③は浅井三姉妹
註3 ①～⑦は江の子の生年順

- ※1 浅井亮政像 (徳勝寺所蔵)
- ※2 浅井久政像 (高野山持明院所蔵)
- ※3 浅井長政像 (高野山持明院所蔵)
- ※4 浅井長政夫人像 (高野山持明院所蔵)
- ※5 伝 淀殿画像 (奈良県立美術館蔵)
- ※6 常高院画像 (常高寺蔵、福井県立若狭民俗資料館写真提供)
- ※7 崇源院画像 (養源院蔵)



▲僧上寺(東京都港区芝)の江(崇源院)の墓

日本の母・江

54歳でその生涯を閉じた江は、二度の落城で両親を失い、三度の政略結婚を強いられるなど、悲運を受け入れ続けましたが、天皇家や関白家(公家)、日本一の大名前田家(武家)など、様々なところに遺伝子(浅井家の血筋)を残していることから、「日本の母」と言っても過言ではないだろう。

代藩主・前田利常に嫁いだ珠姫、三女は越前国福井藩の第二代藩主・松平忠直に嫁いだ勝姫である。四女の初姫は、姉である初代・京極高次の跡を継いだ忠高に嫁ぎました。そして、五女和子は後水尾天皇の中宮(皇后)となり、興子(後の明正天皇、奈良時代以来の女帝であった)を生み、天皇家にも浅井家の血筋を残している。さらに、先に羽柴秀勝との間に生まれた完子は公家の九条家に興入れし、夫忠榮も、また生まれた息子道房も、ともに関白になった。

584年(尾張国大野城城主・佐治一成一に嫁がせ、同年、小牧・長久手の戦いで一成一が秀吉と対立していた徳川家康に呼ばれ、秀吉は、江を茶々の病気を理由に呼び戻し、一年足らずで離縁させます。その後、20歳の江は、豊臣小吉秀勝の妻となりますが、夫の秀勝は朝鮮出兵の途中に病死してしまいました。



▲浅井長政一家の銅像 (浅井・江のドラマ館前)

江の三回目の結婚相手は6歳年下の徳川家二代将軍の秀忠。23歳の時に秀吉の養女になって嫁ぎました。江の結婚は、いずれも秀吉の政略に振り回された「戦国を生きる姫」としての宿命でした。

江の子どもたち

江と秀忠の間には、二男五女が生まれました。長男は竹千代で、後の三代将軍家光です。次男は国松(後の駿河大納言忠長)、長女千姫は豊臣秀頼に嫁ぎ、悲劇を潜り抜けて本多忠刻と再婚し、生まれた勝姫は池田光政の妻となり、備前岡山藩を揺るぎないものにした。次女は加賀国金沢藩の第三